

校長先生の部屋だより

哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。
今月のテーマは、「円はどこにある？」です。

こんにちは。今月は「形のないものにして形の本質」を考えています。今回は音楽について考えて見たいと思います。

私達は音楽を聴くということを当たり前のようには考えていますが、音楽を聴くというのはどういうことでしょうか。そこにも不思議はないのでしょうか。そもそも私達は音楽で何を聴いているのでしょうか。



「音」でしょうか。単なる音ではありませんね。ドとかミといったものを聴いています。もちろんそれだけではありませんけども。大きさとか音色とか和音とかもありますから。ですが今回はこのドレミといった音階を問題にしてみましょう。

さてそれではドの音はどこにあるのでしょうか。ピアノでもフルートでもヴァイオリンでもドの音は出せますね。ですがそのどれもドそのものではありません。ドそのものは音の高さですが、高さそれ自体は耳に聞こえるものではないからです。それに耳に聞こえる音は完全なドでもありません。必ず誤差を伴います。リュート奏者は人生の三分の二は調律に時間を費やし、残りの三分の一は狂った音で我慢して演奏している、と言われているそうです。つまり耳に聞こえる世界には完全なドは存在しない、ということです。

そうすると以前、円について考えたことと同じ不思議がここにあることになります。完全なドは耳に聞こえる形を取っていないにもかかわらず、それなしには耳に聞こえるドは存在することが出来ない、ということです。また私達は完全なドを耳にしたことがないにもかかわらず、それをどこかで知っている、ということです。これは大変不思議なことです。ここにも人間の不思議があり、私達はそのことに驚かざるをえません。

さて、ここから少し古代ギリシャの哲学者、ピュタゴラス派の思想を紹介しましょう。

ピュタゴラスは前 530 年頃に活躍した人で、サモス島に生まれ、前 530 年頃南イタリアのクロトンに移住し、そこで宗教的学問的な秘教的教団を作ったとされますが、その集団の性格上、はっきりしたことは分かりません。

その思想は大まかに言って以下のようなものであったとされます。まず人間の魂は不死で、肉体を取って輪廻転生を繰り返すとされます。いつまでか、というと本来の神性を取り戻すまでです。



人間の魂は本来神性であったのですが、肉体を取ることによって、その神性を失ってしまったというのです。その魂の神性的な性格が調和です。そうしてそれを取り戻すのが魂の浄め（カタルシス）です。そのために宇宙が示す完全な調和（ハルモニア）を観る（テオリア）ことによってその調和を吸収しようとした。そこで重んじられたのが数学と音楽です。

「肉体の浄めのためには医術が必要であり、魂の浄めには音楽が必要である」という教えが伝えられています。何故でしょうか。

音楽は美と調和によって魂に深い作用を及ぼします。ところが音階（ハルモニア）は単純な整数の比であることに彼らは気付いたのです。今までは耳で調律していた音階が、実は 1, 2, 3, 4 という単純な数によっていた、このことは彼らにとっては実に天啓のように感じられたでしょう。1 対 2 がオクターブ、2 対 3 が 5 度、3 対 4 が 4 度となります。彼らはこれによってピュタゴラス音階を組み立てようとした。

ここで彼らが数という原理を発見したことは注目に値することです。何故なら数そのものは見ることも聴くこともできないからです。それまでの古代ギリシャの哲学者（ミレトス派）たちは水とか空気といった、原理的に感覚しうるものを原理として世界の成立を説明しようとしてきました。彫像が形と、大理石といった素材から出来ていると考えるなら、それまでの哲学者が素材の方に着目したのに対し、ピュタゴラス派は形（形相）の方に着目したと言えます。とはいえ、ピュタゴラス派の数はなお純粋に形相であるとは言えず、これが純化されるにはプラトンを待たなければなりません。

それはともかく、こうしてピュタゴラス派は、音楽の調和（ハルモニア）、美の原理は数であると考えました。すなわち無限定な音域の連続体に数という限定が働くことによって調和（音階）が成立する、と考えたのです。

彼らはさらにこれを他の全ての存在に拡大し、調和、美、秩序の原理は一般に数である、と考えました。そうして彼らは宇宙（コスモス）は秩序（コスモス）である、と主張するに至ります。宇宙をコスモスと呼んだのはピュタゴラス派が最初だと言われています。彼らは太陽と月と 5 つの惑星が奏でる 7 弦琴の天体音楽を聴き取ったと言われています。

これで彼らが魂の浄めのために数学と音楽を重んじた理由が分かる気がします。とはいえどこか宗教的で理解しがたい面があることも事実です。しかしこれを迷信として打ち捨てるのではなく、もう少しこの説について考えて見たいと思うのです。その前にピュタゴラス派のピロラオスの思想を見ておきましょう。これも興味深い説なので。でも、これは次回にしたいと思います。